

時代の証言者

音楽が好きで、数多くのアーティストにインタビューしてきましたが、私自身歌いたいという欲求は常にありました。あくまでも、道楽としてですけども。

「スワン・シスターズ」という4人組の女性コーラスグループを作ったのは2004年。友人から「歌を始めたいのだけれど、歌唱指導の先生を紹介して」と頼まれたのがきっかけでした。メンバーが何回か入れ替わり、7年前に、最初のメンバーであるジャーナリストの下村満子さんと私、そこに細川佳代子さんと鳩山幸さんが加わりました。4人のうち2人がフアース

音楽は愛 ゆかわ 湯川 れい子 28



スワン・シスターズのチャリティーコンサート。前列右から2人目が湯川さん(2010年12月、前田昌宏氏撮影)

トレディー経験者なんてちょっと豪華でしょう。なぜ「スワン(白鳥)」

希望と喜びのゴスペル

かといえば、一見優雅に見えるけれども、実は水中ではいつも懸命にバタバタと足で水をかいていて、へたに近寄ると結構どう猛……私たちにどこか似ているからです。ブルー・コメッツでキーボードを担当している作曲家の小田啓義さんらが先生で、月2回のレッスンを続けているので、1時間半のチャリティーショーができる態勢です。

同じ頃、「東京女声合唱団」というゴスペル・グループを結成しました。

▲ゴスペルとは、英語で福音の意味。米国南部の黒人の礼拝集会などで演奏され、発展した。いまやキリスト教の枠を超えた癒やしの音楽として日本でも受け入れられている。

独立プロで売れない女優

をしていた1950年代後半、劇団仲間に入れられて、新宿の「どん底」などの歌声喫茶に行きました。「若者よ」とか、労働歌とか、手を振りながら歌っても全然楽しくなくて。私がその頃夢中になっていたジャズと何が違うのか考えてみると、からだの揺れ方なんです。横に揺れるとからだは弾んで、心も開放されていく。それで、日本人がもともと持ち合わせていない横揺れのリズム感を取り入れて、もっと元気に歌おうと企画したのが、ゴスペル・グループでした。

2006年、宮川彬良さんの曲に詞をつけて、命の大切さをテーマにした「きずな」という日本製ゴスペル・ソングを作りました。

日本のゴスペルの母、亀淵

友香さんのソロに、私はバック・コーラスの一員として参加。08年、スペインバルオリンピックスの日本応援歌にもなり、今では「きずな」を通して各地で交流が広がっています。

ゴスペルの存在は、私が敬愛するエルビス・プレスリーのルーツであり、ロッキンロールそのもの。アメリカ音楽のルーツを訪ねると、ほとんどがゴスペルに行き当たります。

ゴスペルを歌うことで、自分の中で昇華しきれない悲しみなどを全部吐き出すことができるし、歌い終わると、とてもすっきりした気分になって、誰とも打ち解けて話が弾みまます。歌うことによってほとぼるの感情というのは、憎しみでも悲しみでもない、希望と喜びであることを、ゴスペルが教えてくれたような気がします。

(編集委員 永峰好美)

時代の証言者

今年4月30日のポール・マッカートニーの来日公演が終わった後、しばらく「ポールロス」に陥りました。2年前の来日時より深い喪失感がありました。

▲「○○ロス」が一般的に広まったのは、2013年のNHK連続テレビ小説「あまちゃん」の終了を惜しむファンがネット上などで「あまロス（症候群）」を訴え始めてから▼

私自身が年を重ね、ポールも白髪が増えているのだけれど、コンサートの内容はますます濃密に、温かくなっています。いつかなくなるとは思いません。いつかなくなるとは思いません。いつかなくなるとは思いません。いつかなくなるとは思いません。

音楽は愛 湯川 れい子 30 最終回

音楽への共感 生きる喜び

らこそ、一瞬一瞬が貴重で愛おしくなるのです。

ポールの歌を聴いていると思いが蘇ります。たとえば、ジョン・レノン。ビートルズ解散を巡って2人は仲たがいがいいことがあったけれど、今回の武道館のステージでも、「ジョン亡き後、僕がジョンに捧げた歌」と言っていて「ヒア・トゥデイ」を歌いました。本当にかげがえのない友達だったことが熱く伝わってきました。

ポールがソロコンサートで初めて来日した1990年はまだビートルズのナンバーを演奏する姿勢を見せませんでした。2013年以降変わってきて、亡くなったジョンやジョージとも対話しながら歌っている。様々なわたがかりを超え

都内のホテルで開かれた80歳を祝うパーティーには1000人以上が集まった。2016年6月、前田昌宏氏撮影



自分がビートルズの歴史を背負って音楽を体現する存在であると自覚して、一曲一曲に心を込めて歌っている。そう思うと、武道館でまた、何度もほろ泣きしてしまいました。

80歳を迎えた昨年、「音楽評論家55年 作詞家50

年」を、音楽業界の皆様に分不相応なくらい盛大にお祝いしていただきました。

エルビス・プレスリーが黒人と白人の文化を融合してロックンロールという大爆発を起こし、それがイギリスに飛び火してビートルズが誕生し、さらに、肌の色などを超越してマイケル・ジャクソンが活躍の場を広げていった……。ポプスには、歴史を作った何人かのスターがいました。私はたまたま同じ時代を生き、彼らに出会えたというのは本当にラッキーでした。そして、彼の最初の一曲を聴いた瞬間に「何これ？ スゴイ！」と思ったこと、その直感を信じられたことが、とてもありがたかったと思いま

す。

理屈でなくて、体感でした。胸がキュンとして肉体が反応する「毛穴感覚」で、私はそれを大切にしてきました。

からだや心を熱くしてくる音楽やアーティストに共感し、共鳴するエネルギーは、生きて存在することの自由と喜びに満ちあふれています。音楽がそこにある時は平和で、誰もが笑顔になれる——基本的に音楽は「愛」なのです。だからこれからも、あらゆる争いのタネになるものを注意深く除きつつ、共に音楽を聴いて、元気に楽しく生きていきましよう！

◇

この連載は編集委員の永峰好美が担当しました。コピーライター（有料）は読者センター（☎03・3246・2303）へ。10日から「囃家の了見 柳家権太楼」が始まります。